第41回

「地球温暖化」をはじめとする環境問題がますます身近になる一方で、世界の国々が賛同できる国際枠組みの構築は困難な状況にあります。

このような状況下で対策が急がれる中、国際社会はどのように取り組むべきなのでしょうか。

CSRの最先端アメリカでの実体験をもとに日本企業向けのCSRコンサルティングを行うコーポレートシチズンシップ代表の雨宮氏から世界で行われている地球環境問題解決への取り組み等について、ご紹介いたします。

コーポレートシチズンシップ　代表取締役　雨宮 寛氏

ペット(犬・猫)の置かれている環境を考える

普段あまり見かけることはありませんが、夏休みの時期になると、電車で移動する際、家族旅行の一行にペットを帯同する家族を見かけることがあります。今回はこのペットについて記したいと思います。

筆者は「グローバリゼーションと企業市民活動」というCSRの講義を明治大学公共政策大学院（専門職大学院ガバナンス研究科）で担当しています。今期は夏期集中講座の日程で8月1日～5日の期間で開催しました。このうちの4日（日）を企業向け従業員ボランティア活動のプロジェクトを体験する実習にあてました。この実習は筆者が理事を務めるNPO法人ハンズオン東京に協力してもらいました。ハンズオン東京は、企業向けに従業員ボランティア活動を企画する一方、ボランティア要員を必要とする団体（社会福祉法人やNPOなどの非営利機関等）に対して企業や一般個人のボランティア希望者から参加者を募り、当該団体にボランティア要員を送り出す活動をしています。

ハンズオン東京が今回のボランティア活動を行うにあたり紹介してくれた団体が「NPO法人東京キャット・ガーディアン（http://www.tokyocatguardian.org/）」でした。同NPOの主たる活動ですが、ホームページから抜粋しますと、「NPO法人東京キャットガーディアンは大塚・西国分寺の猫カフェ型開放型シェルターを拠点に、殺処分ゼロを目指し、行政（保健所・動物愛護センター）などから猫を引取り、飼育希望の方に譲渡する活動（猫の里親募集・譲渡活動）並びに地域猫活動をおこなっています。」とあります。

また、同NPOの名称や活動拠点は東京ですが、横浜市や川崎市からも猫を引き取り、譲渡するまでの飼育をおこなっています。

今回、筆者の夏期集中講座を受講した大学院生は4人でした。東京都の地方自治体に勤める市役所職員の方が2人と民間企業に勤める方2人でした。市役所職員の方の1人が以前保健局関係の仕事をしているとき、一般市民からの野良猫、野良犬などの苦情電話がひっきりなしにかかってきました、と話していました。公益財団法人神奈川県動物愛護協会（http://www.kspca.jp/index.html）のホームページを調べてみますと、最新のデータは2009年度と数年前になってしまいますが、野良猫、野良犬の収容頭数は7,187頭でした。このうち里親に譲渡することができず、殺処分となってしまった数が5,439頭で、そのうち犬が515頭、猫が4,924頭でした。単純計算ですが、2009年度に収容された頭数に対する殺処分頭数は約75.7%となり、4分の3の確率で殺処分されてしまうのが実態です。この割合は年々減少しているということですが、飼い主から捨てられてしまった猫や犬の多くは殺されてしまう現実があります。環境省のホームページ(http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html）に全国のデータが掲載されています。2011年度のデータから、全国では22万1000頭（内訳：犬7万7,805頭、猫14万3,195頭）が収容され、17万4,742頭が殺処分されています。前述の割合で示しますと約79.1%となります。全国レベルでみると、殺処分されてしまう可能性はさらに高まり8割となっています。

里親を探す、という前向きな活動を行っているのですが、その背景にはこのような数字が存在しているという現実を同NPOの職員の方からお話し頂きました（具体的な説明はもっと身近なデータを用いてお話し下さいました）。ボランティア活動を行う前にご説明頂いたので、筆者も受講生の方々もやや重苦しい雰囲気でスタートしたのですが、ボランティア活動そのものは前向きな活動でした。同NPO法人は名称から猫の里親を探すことを目的としています。老若男女の猫が同NPO法人では飼われているのです

が、子猫もたくさんいます（**画像1**）。子猫の小屋は小さいため、小屋の柵や中を掃除する時に大きな雑巾ですときちんと拭き掃除ができないため、雑巾用のタオルを子猫の小屋を拭けるくらいに小さくハサミで切るという作業をしました（**画像2**）。また、猫と里親が触れ合う広場が同NPO法人の施設内にあるのですが（**画像3**）、そこに置く椅子を白く塗装する作業をしました（**画像4**）。いずれも数時間で、男女問わず行える作業でした。

画像1：子猫の小屋が集まる部屋

画像2：ボランティア時間内に仕上がった小さな雑巾

画像3：猫と里親候補が触れ合うスペース

（注：画像は全て筆者撮影）

とくに小屋用の小さな雑巾作りは、伝染病などを防止するために、一度拭き掃除に使用したら二度と使用しないため、常時大量の小さな雑巾が必要になります。こういった作業であれば、材料となる普通の大きさの中古物のタオルとハサミがあれば、いつでもどこでもボランティア活動できるので、企業向けのボランティア活動には向いていると思いました。

野良猫、野良犬として行政に収容される数は年々減少傾向にあります。これは繁殖しないように不妊治療や去勢がペットとして人々の手に渡る最初の段階からされていることも大きな理由だと思います。さらに同NPO法人でも飼育する猫で不妊治療がされていない場合は専属の獣医に治療を施してもらい、繁殖を抑えることをしています。

高齢社会が急速に進む中、余生を同じ年数生きるような高齢のペットと過ごしたいという中高年の人たちが増えてきているといいます。人間、ペット、ともに豊かな暮らしができる社会環境にしていくことが大切なのでしょう（**画像5**）。

画像4：白色に塗った椅子

画像5：同NPO法人山本代表（左端）、受講生、筆者（右端）

略歴

コーポレートシチズンシップ代表取締役。DWMアセット・マネジメント：DWMインカムファンズ日本代表。明治大学公共政策大学院兼任講師。CFA協会認定証券アナリスト。NPO法人ハンズオン東京理事。コロンビア大学ビジネススクール経営学修士およびハーバード大学ケネディ行政大学院行政学修士。クレディ・スイスおよびモルガン・スタンレーにおいて資産運用商品の商品開発を担当。2006年コーポレートシチズンシップを創業。「あなたのTシャツはどこから来たのか？」（ピエトラ・リボリ著　東洋経済新報社）「暴走する資本主義」「余震　そして中間層がいなくなる」（ロバート・ライシュ著　東洋経済新報社）などを翻訳。「アショカDVD・社会起業家シリーズ」監修。